抜粋版

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza *No:18*

2002年７月

日本バスケットボール振興会

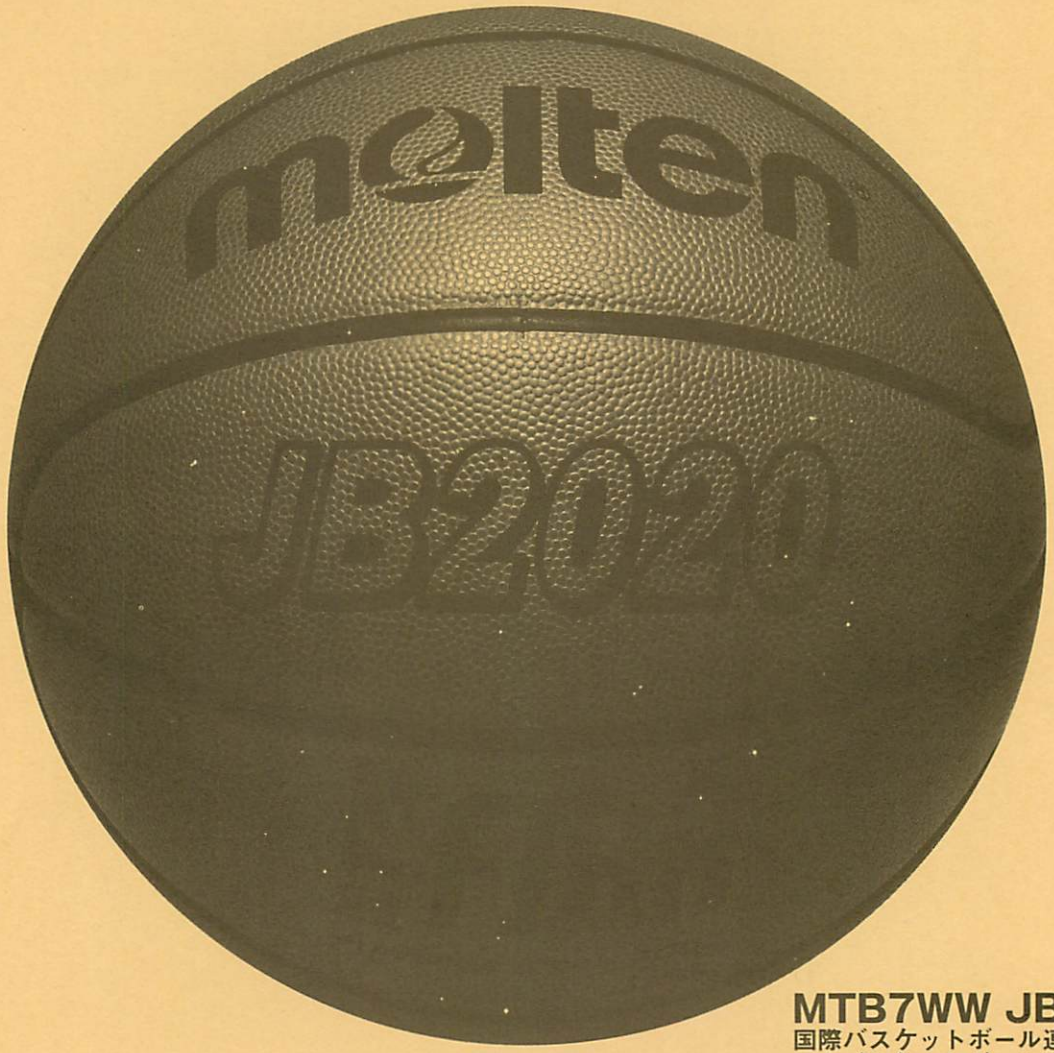
唯一の公式試合球

国際バスケットボール連盟
主催国際大会

アジアバスケットボール連盟
主催大会

バスケットボール
日本リーグ機構主催大会

バスケットボール女子
日本リーグ機構主催大会



MTB7WW JB2020
国際バスケットボール連盟公認球
日本バスケットボール協会検定球
○貼り○天然皮革○7号球○ワイドチャネル

ISO9001認証取得

闘う者に、ベスト・エキップメント。

molten®

株式会社 モルテン
東京本社 〒130-0003 東京都墨田区横川5丁目5-7
大阪・名古屋・広島・福岡・四国・仙台・札幌・リノUSA・デュッセルドルフG

目　　次

○　平成１４年総会報告概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

○　講演会報告
　バスケットボールの歴史に学ぶ ・・・・・・・・・・ 水谷　豊 ・・・１１

○　バスケットボールの誕生 ・・・・・・・・・・・・・・・ 関口　荘次・・・１４

○　特別寄稿
　バスケットボール・わが青春 ・・・・・・・・・・・ 河原　武雄・・・１７

○　特集
　中学生のバスケットボール・・・・・・・・・・・・・・ 普及部会　・・・２１
　――　その現状と展望　――

○　風神雷神
　日本のバスケットについて思うこと・・・・・・・・・ 笹岡　太一・・・２７

○　わが軌跡
　私とバスケットボール・・・・・・・・・・・・・・・・ 大橋　貞雄・・・３０

　兄達の後を追って始めたバスケットボール・・・・・ 葛尾　和弘・・・３３

○　会員だより
　バスケット回顧録・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 廣瀬　隆博・・・３５

　バスケットボールが私の人生を創った・・・・・・・ 佐藤　静子・・・３７

○　全国高校総合体育大会（インターハイ）組合わせ決まる ・・・・・・・・・３９

○　各団体主要スケジュール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４０

○　事務局だより ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４５

講演会報告（要旨）

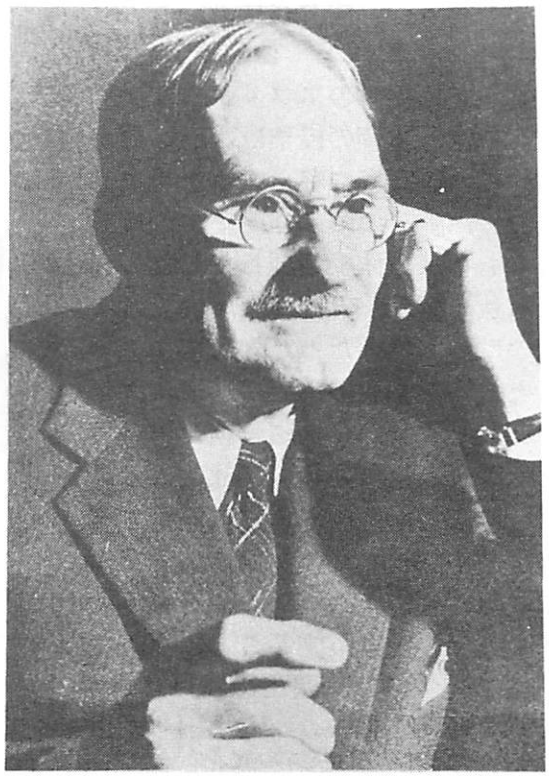
「バスケットボールの歴史に学ぶ」

振興会では３月２２日開催の理事会後に、水谷　豊氏を講師に迎えて講演会を開催し、バスケットボールの考案者Ｊ.ネイスミスを中心にしたバスケットボールの歴史についてスライドを映写しながらお話しいただいた。

水谷　豊　氏

1943年（昭和18年）生まれ岐阜県出身、東京教育大学卒業後、上越教育大学などを経て現在桐朋学園短期大学部教授、日本協会理事（国際部長）も兼務。

数年前にロンドン経由でネイスミスの祖国、スコットランドに立ち寄りました。ご存知のようにイギリスの北部に位置し、スコッチウィスキーなどで有名な国です。そこのグラスゴーという町がネイスミス家の本籍地なのです。町の図書館で電話帳をたぐったところ、“Naismith”が付いた多くの名前が確かに掲載されていました。昔のグラスゴーがどんな様子だったのかを調べたところ、次のようなことがわかりました。



ネイスミス

19世紀に入った頃のグラスゴーは、多くの人達が農業を営んでおり、ネイスミス家もそうでした。ところがグラスゴーは寒い冬が長く、暮らし向きは一向に楽にならず、ネイスミス家も生活苦にあえいでいたようです。そんな暮らしに見切りをつけ、北米大陸（アメリカ・カナダ）での豊な生活を夢見て、移民としてグラスゴーを去る農家が相次ぎ、とうとうネイスミス家も船で大西洋を渡りカナダへ移り住んだのです。

モントリオールを経て、現在のオンタリオ州オタワ近郊のアルモントという、スコットランド人が多かった村に入植しました。ところがそこもまた寒村で、痩せた土地での収穫では日々の生活を支えるのがやっとでした。

楽な暮らしを求めてスコットランドから渡ってきたものの、現実は厳しく、ネイスミスの両親は３人の子供（ネイスミスの他に姉、弟）を育てるために必死で働きました。両親は無理がたたり、ネイスミスが９歳の時に病死したのです。両親と死別したネイスミス達は“孤児”も同然となり、叔父のピーターのもとに引き取られました。

それでもネイスミスは体格も良く、意志の強い少年に育っていきました。生計を

たてる農作業はピーターだけでは男手が足りず、ピーターの頼みに応じたネイスミスは、学校をやめて農作業を手伝いました。また、貧農の故に弟が医者の治療を受けることなく死亡し、次第に自分の人生に思いをめぐらすようになり、「逆境の人々を救う牧師になろう」と決心しました。

幸い、モントリオールにあるマッギル大学に奨学金を得て入学することができ、その後、同大学の隣にある長老教会派神学校に進むよう計画していました。ところがマッギル大学在学中のある日のこと、フットボール部の練習にひょんなことから飛び入りしたのがきっかけとなり、思いがけず宗教とスポーツの板挟みになってしまったのです。当時は「筋肉活動（スポーツ）とキリスト教の信仰は相容れない」とされていたからです。

そのころマッギル大学には学生ＹＭＣＡ（大学内キリスト教青年会）が組織されており、ネイスミスはこれを縁にモントリオールＹＭＣＡへ相談に行きました。そして、アメリカ・マサチューセッツ州スプリングフィールドに全米のＹＭＣＡスタッフの養成訓練を目的として 1885 年に新設された、２年制課程の“キリスト教奉仕者学校”という学校への入学を勧められました。ネイスミスはこのアドバイスに頷き、1889 年９月に入学しました。既に学卒だった彼は１年間のみの課程修了が認められ、1890 年 6 月、29 歳の時に卒業し、同時に同校の教員（インストラクター）に採用されたのです。（1891 年２月、同校は“国際ＹＭＣＡトレーニングスクール”と名称変更）

この頃の建築工学では「体育館」といっても現在のようなものは建てられず、狭くて天井も低い体育室に近いものだったのです。

雪が多い冬季のスプリングフィールドでは、体育の授業はグランドからせまい体育室に移らざるを得ませんでした。その頃の体育室での授業は、もっぱら体操系種目でした。春から秋のグランド種目を屋内で行なうのは到底無理だったからです。

当時の国際トレーニングスクール

ところが学生の大半は、既に大学を卒業してＹＭＣＡに勤務し再教育を受けにきた、いわば“社会人入試組”でした。体操系種目に満足するはずがありません。次第に体育室における授業に不平不満の声が募り始め、紆余曲折を経てネイスミスが“屋内でできるスポーツ”を考案することになったのです。

ネイスミスは「頭上に設けた水平のゴールにボールをショットし合う」という画期的な形式のゲームを考え出し、ボールはサッカー用球、ゴールは桃の収穫時に使われる籠を用いることにしました。1891 年 12 月 21 日、最初１８名の学生を９名ずつに分けてゲームを行なったところ、学生達には受けに受けて大成功でした。このときネイスミスはこのスポーツの名前をまだ決めていませんでした。まもなく冬休みに入り学生達は帰省し、この新しいゲームを帰省先のＹＭＣＡで紹介しました。休みが明けるとネイスミスの授業は連日盛り上がりました。籠（バスケット）とボールを用いるので“バスケット・ボール”と名付けられ、ネイスミスは同校の広報誌に詳しく説明を載せました。その広報誌は全米のＹＭＣＡに送られていたので、たちまちのうち

にバスケットボールはアメリカの隅々にまで知れ渡りました。１個のボールと籠さえあれば、どこでも手軽にできるということで、ＹＭＣＡを離れて人々の生活に溶け込んでいきました。

その後、籠の底に穴をあけるなど用具も工夫され、競技スポーツ化も進み、やるスポーツのみならず、見るスポーツとしても急速に普及していきました。

外国への普及はヨーロッパでフランスが先陣を切ったようですが、当時の写真を見ると審判は興味深いことに燕尾服を着ています。日本では大森平蔵が、1908 年に神田のＹＭＣＡでひもといたのが最初だとされていますが、彼は 1913 年に客死し本格的な普及に結びつきませんでした。大森の他界からまもなく、日本ＹＭＣＡ同盟がアメリカからＦ.H.ブラウンを招聘、関西のＹＭＣＡから本格的な指導を手がけて、ようやく日本にバスケットボールが定着し始めました。彼は 1930 年まで実に 17 年間も、日本のＹＭＣＡで指導し続けたことをご存知の方は多いと思います。

1936 年、ベルリンオリンピックで男子正式種目となり、日本も出場していますが、コートは屋外でテニスコートと兼用でした。当時あいにく雨が降って決勝戦は、まさに“泥んこ合戦”だったと言われています。

ネイスミスは、国際ＹＭＣＡトレーニングスクールから、カンサス州にあるカンサス大学へ転勤しましたが、ここが終生の地となり 1939 年に亡くなりました。

カンサス州ローレンスにある墓地を訪ねたところ、意外なことに墓石は地面に埋められただけの質素なもので驚きました。しかも伸び放題の芝生で墓石が隠れてしまっていて「これが？」と思わせるようなものでした。

やがてバスケットボール生誕１００周年を迎えた時、アメリカとカナダが記念ポスターや記念切手を作りました。カナダは“創案者の母国”、アメリカは“ゲームの創始国”という立場で面子をかけて突っ張り合いました。

当の考案者ネイスミスは、「自分の考案品で一儲け」などという俗世間的なことに全く無頓着な人でしたから、そんな面子をかけた突っ張り合いなど、どうでも良かったのではないでしょうか。ただ一つ彼が願ったことは、「将来を担う子供達が１人でも多くバスケットボールをこよなく好きになり、やがてその子供達が、次ぎの将来を担う子供達にバスケットボールの楽しさを伝え続けてくれるように」ということでした。

［振興会理事］

バスケットボールの誕生

関口　荘次

バスケットボールが世に出たのは1891年(明治２４年)、現在から110年余り前のことである。

場所は、アメリカのマサチューセッツ州スプリングフィールドの国際ＹＭＣＡトレーニングスクール(International YMCA Training School)で、考案者はそこの体育インストラクターだったジェームズ・ネイスミス(Dr.James Naismith)という人である。

1891 年当時アメリカの一般的な傾向として、室内体育館において行なわれる体操種目は、ドイツ体操、スウェーデン体操、そしてフランス体操といったようなもので、これには誰もがほとほと閉口しきっていた。これらの種目を、薄暗い体育館でしかも号令によってのみ動くというだけではいかにも無味乾燥であり、この長い灰色の期間（冬季の体育館における授業）を呪いたくなるのも当然であった。スプリングフィールドだけでなく、スキーを楽しむ人や、南部地方へ寒さ凌ぎに出かける人達を除いては、冬季の体育の授業は、冬眠状態を続けるよりほかに仕方がなかった。

したがってこの学生達は、いつしか不平不満が嵩じ、何かにつけその発火点を求めて、爆発もしかねないという状態に陥ることもしばしばであった。

そこでこの空気をいち早く察したのが、かの有名な体育科長ルーサー・ギューリック博士だったのである。博士は同僚とともに、この冬眠状態をいかに切りぬけるかというよりも、むしろこの不穏な形勢にある冬季の体育カリキュラムをいかに改善し実行すべきかということについて、当時行なわれつつあったゲームやスポーツをあらゆる角度から検討し熟議することに努めた。しかし当時のスポーツと体育との関係は、スポーツ自体全く体育の分野からかけ離されていたし、体育のインストラクターはまた口を揃えてスポーツの非科学性を論じ、スポーツは体育にあらずとまで公言してはばからなかった程であったので、あらゆる年齢層の人達が、レクリエーションとしてのゲームすらできず、そうかといって体操に興味をつないで行くことも事実至難だったのである。

ちょうどその頃、ネイスミスは同トレーニングスクールに任用されて、ギューリック博士の協力者とともに学生達の指導にあたっていた。1891 年の春にギューリック博士から冬季の室内スポーツの必要を説かれた彼は、幾度か検討を重ねてみたが、遂に結論を得ずに終わってしまった。その夏の休暇時に開かれた体育インストラクターの研究会においても、同じ問題について研究し討論を重ねてみたが、やはり満足すべき成果を見るに至らなかった。

その後、彼はマーサズヴァインヤード（マサチューセッツ州）のニール・ポッセ男爵のところに行き、さらに研究を続けたのであったが、ここにおいてどうやら明るい見通しを持った或る一つの案を見出し、狂喜してギューリック博士のもとへ走った。

９月の新学期が始まった。博士は同トレーニングスクールで新しいゼミナールとして、心理学に関する講座を開いた。彼は同僚であるアロンゾ・Ａ・スタッグとともに、その講義を受けたのであった。ギューリック博士は、両者の研究に成功の灯をともす

かのように「太陽の下にはもはや新しい競技は出現しない」と高唱した。ネイスミスはそれに応えて「もし先生の言のごとくならば、太陽の下でない室内のゲームで、我々の欲求を満たすに足るだけのゲームを考案しましょう」と述べた。ギューリック博士はその決意をよしとして早速全クラスにこの問題の研究を課したのである。

このような状態で 1891 年の秋は過ぎ、またしても単調にして無味乾燥な、そして不愉快な毎日が続き、学生達の不平不満は期せずして頂点に達した。

この頃ようやく実験の域にまで研究をこぎつける自信を得たネイスミスは、早速緊急教授会で熱心にこれを説明し、彼の一言一句は遂に教授会を動かすに至った。そこで教授会ではその研究と実験とを彼に命じた。彼は学生達の興味をつなぐ方法で、この冬季の体育の授業を円滑に展開し、不穏な空気を一掃することと、その状況を絶えず教授会に報告することを約束した。

彼は案を練ってこれにあたったが、数日の実験はいたずらに失望を重ねるに過ぎなかった。しかしながら、彼がまず四つの原則を割り出して考えたことは、一つの大きな進歩となった。

（1）手をもって扱うが、手の中に隠し切れないボールを用いる興味本位のゲームであること。
（2）誰でもプレイできて習いやすいこと。
（3）習いやすいけれども、熟練するには相当の努力と工夫とを要し、その熟練後もなお完成の域には到達しがたいこと。
（4）アメリカンフットボールから粗暴さを除いたものであって、室内でプレイできること。

しかしながら、この４原則のみではすぐに行き詰まりがくることは必至で、教授会を明日に控えて彼の苦慮は甚しかった。彼はその夜殆ど一睡もせずにそれまでの教授会で行なわれた討論の結果を考えていた。すると突然彼の頭に一点の光明が輝き出した。それは原則の組み合わせということであったのだ。それから彼は、短い時間で競技の直接的な四つの原則と１３箇条のルールを書き下ろした。

（1）手にボールを持っている競技者は、ボールを保持している間は前進することができない。
（2）ゴールは水平に置き、しかも競技者の頭上にあること。
（3）粗暴さをできるだけ制限し、身体的接触をしない競技とすること。
（4）身体的接触をせずにボールを手にした競技者は、いつでもボールを保持していられること。

以上を基本として、次の１３箇条のルールができあがっていった。

第 1 条　ボールは片手あるいは両手でどちらの方向へ投げてもよい。
第 2 条　ボールは片手あるいは両手でどちらの方向に叩いてもよい。(拳は不可)
第 3 条　競技者はボールを保持して走ることはできない。競技者はボールをキャッチした地点からそれを投げなければならない。走りながらボールをキャッチした場合停止しようとするならば、多少位置がずれても斟酌される。
第 4 条　ボールは両手で保持しなければならない。ボールを保持するのに両腕や身体を用いてはならない。
第 5 条　相手はどのような方法でも、腕でこずいたり、捕らえたり、押したり、つまづかせたり、叩いたりすることは許されない。第１回目の違反は一つのファウルと数え、２回目の違反者は次のゴールが成功するまでゲームから除外

される。もし相手を傷つけようとする明らかな意思のある場合には、その後のゲーム終了まで交替は許されない。(出場できない)

第６条　拳(こぶし)でボールを打ったり、第３、第４条の違反および第５条で述べたようなことは全部ファウルとして取り扱う。

第７条　どちら側でも連続して三つのファウルを犯すと、相手に１ゴールを与える。(連続とはその間に相手が一つもファウルをしないことである)

第８条　ボールが地上から投げられ、また叩かれてバスケットに入り、あるいはバスケット内にとどまればゴールとなる。もしボールがバスケットの縁に止まったり、相手がバスケットを動かしたりした場合は１ゴールに数えられる。

第９条　ボールがアウト オブ バウンズへ出た場合には、その後最初にボールに触れた者がコート内へ投げ入れる。彼は５秒間だけ妨害されずにボールを保持していることができる。もしどちらに属するか判らない場合には、アンパイアがそこから真直ぐに投げ入れる。スローインに５秒間が許されるがこの時間を超えるとボールは相手のものとなる。また、どちらかがゲームを遅らせようとする場合は、アンパイアはそのチームにファウルを宣する。

第10条　アンパイアは競技者を審判し、ファウルを記録し、連続して３回ファウルのある場合は、レフリーに知らせる。また彼は第５条によって競技者を失格させることができる。

第11条　レフリーはボールを審判し、いつボールがインプレイとなるか、インバウンズになるか、どちら側に属するかを決定し時間を計測する。また、いつゴールインとなったか、幾つのゴールを成功させたかを数え、その他普通にレフリーの行なっている任務を担当する。

第12条　タイムは二つの１５分間ハーフとし、その中間に５分間の休みをおく。

第13条　最も多くのゴールを入れた方を勝者と宣言する。もし同点の場合は主将の合意で次のゴールが成功するまで続ける。

以上、１３箇条のルールは、僅か一夜にして案出したものであるが、それにしてもルールと競技法に関する限り、ネイスミスの数ヶ月にわたる“血みどろの努力”が一応ここに実を結んだのであった。

1891 年 12 月、スプリングフィールドの国際ＹＭＣＡトレーニングスクールの体育館に釘づけにされたバスケット（桃の収穫時に用いる籠）を用いるボールゲームは、“科学的スポーツの粋”と呼ばれ、今日世界３大スポーツの一つとして、幾多の進歩、改良を重ね、ルールも何回となく改廃増補された、現在のバスケットボールの第一歩であった。

1891 年のクリスマス休暇がきた。楽しいクリスマス休暇を家庭で迎えようと、家路に着く学生達のバッグの中には、この新しいスポーツ「バスケットボール」の説明書が秘められていた。かくしてアメリカやカナダの各地に帰郷した彼等によってバスケットボールは一気に紹介されていった。翌 1892 年の 1 月 20 日は、バスケットボールの正式の試合が初めて国際ＹＭＣＡトレーニングスクールで行なわれた記念すべき日であった。そして、バスケットボールを身につけた卒業生が巣立って行く６月がきた。やがてこの卒業生が、全米はもとよりＹＭＣＡの組織を通じてバスケットボールを全世界に広めていき、それが今日の発展に結びついていったのである。

［振興会常任顧問］

特別寄稿

バスケットボール・わが青春

河原　武雄　氏

大正２年長野県生まれ８９歳、旧制長野商業でバスケットを始め、旧制松本高校（現信州大学）ではキャプテンとしてスタートメンバーに。昭和１４年、日本放送協会（ＮＨＫ）入局、２６年間にわたりアナウンサーとして主にスポーツ中継を担当、特にバスケットはよく知っていたので楽しく放送できたとか。現在でも自宅でボールを楽しむ程の、はつらつとしたバスケット大好き人間。

◇選手生活１０年

長野商業(旧制)の校庭にバスケットボールのゴールが建ったのは、私が入学して間もなくであったから大正１５年(1926)頃だったろうか。真新しい白い支柱に支えられたバスケットゴールを見たのはこれが初めてで、体操の先生が放課後帰ろうとする生徒を呼びとめて、遊んでいかないかと勧めてくれたのが最初の出会いであった。

白い板に向かってボールを投げる。跳ね返ったボールがすぽりとネットをくぐって落ちる。板のどの辺に当てればどうなるか。角度によって変化する。ボールに回転を与えれば、さらに微妙な変化を見せる。バスケットボールの魅力の一つはシュートの面白さだと今も信じているが、こんな面白い遊びはないと、以来病みつきになるのにさして時間はかからなかった。

バスケットボールが冬季に室内でできる競技として、アメリカのＹＭＣＡで考案されたのは 1891 年である。それから３５年が経っていた。当初わがチームは学年別に編成されていたが、昭和４年私達が５年生になった時、初めて後輩達を吸収して全校代表としての形を整えた。

当時、籠球部の部長に就任した新任の英語教師が東京商大卒という関係もあり、前年から商大ＯＢのコーチを受け、昭和４年３月の春休み中には商大の現役選手中村幸治氏らをコーチに迎え、ゾーンディフェンスなどを仕込まれ、めきめきとチーム力が上がっていった。そしてその４月、県下の選手権に勝ち、第９回全日本総合選手権に駒を進めた。

日本青年館の宿舎で洋式トイレに初見参、その使い方に戸惑うほどの田舎チームだったが、神田のＹＭＣＡ体育館で開かれた大会では、第１戦に山形代表に勝ち、２回戦でわが先生格の商大と対戦、40－22 で一蹴された。

この大会で忘れられないのは、最終日まで残って見学した商大対早大の決勝戦だった。試合は「オッパイ」の愛称で親しまれていた名人センター大橋を中心に、植田、樋口の両フォワード、ガード中村らで固めた商大が攻守に勝り、長身センター大内を擁する早大を圧倒、優勝を飾った。文字通り日本最高のゲームを目の当たりにして私は興奮した。

その年の９月に松本二中体育館で開かれた松高(旧制松本高等学校)主催の中等学校大会は、かねてからの最大の目標であったが、高田師範、松本二中に勝ち、決勝で宿敵長野工業を破って待望の初優勝を遂げる。さらに１０月、東京でのインターミドルに出場、初戦を突破したものの、新潟中学との２回戦で敗退する。

これが長野商業時代の私の主な戦績だが、この間松高ファルコンクラブを相手に２、３回は練習試合をした経験がある。当時、県下の籠球界では松高が一歩先を行き、中央の空気を吸収していた先輩格で、何かと教えられるところが多かったが、当時のファルコンでは、今も健在の鈴木明治氏や、亡くなった更級　勉氏が懐かしく思い出される。

ファルコンとの勝敗がどうだったのかは記憶にないが、ほぼ互角だったのではなかったかと思う。今でも覚えているのは松高のアウトドアコートで闘った試合である。

木柵に囲まれたコートサイドは一面緑濃いクローバーに覆われ、まるで公園のような恵まれた環境のコートに目を見張ったものだ。こうしたファルコンとの交流の中で、あるとき鈴木氏が「今度入江といういい選手が入ったから松高は強くなったよ」と漏らした一言が不思議に頭に残った。

その入江選手の名人振りを、昭和５年私自身が松高に入学しチームの一員となって身近に見ることになった。その年東京でのインターハイで松高は入江収三、八代正雄両選手（共に府立四中出）を中心に勝ち進み、惜しくも決勝で成蹊高校に敗れるという大活躍を演ずる。

このとき私は夏休みということで、長野の家に戻り家業の本屋を手伝っていて、この栄光のチームに参加できなかった。後年古澤先輩（旧入江）に「来れば良かったのに」と繰り返し言われたが、私自身も“親不孝”ついでに行っておけば良かったと、千載一遇のチャンスを逸した思いが強く、今でも残念で仕方がない。

翌昭和６年のインターハイは、府立四中出身の菊池隆吾、高柳致治の両選手や長身の酒井恒明主将といった主力が健在で、これに金井勝彦、河原のスタートメンバーで闘い、松山、佐賀、武蔵高校などを破り、準決勝で大阪高校に敗れるまでまずまずの成績を残すことができた。

この大会で鮮やかな印象を心に残したのは前夜祭の交歓風景である。京都帝大大講堂をうずめた参加各校選手の寮歌の競演で、松高は校歌を斉唱した。「千山萬岳高きを競い……」朗々たるわがチームメートの歌声は正に堂内を圧する感があり、私はこの時しみじみと“松高の誇り”といったものが沸々と胸中にみなぎるのを感じた。

この年の秋、松高はレギュラーメンバーの５人だけで神宮大会の県予選に参加して優勝し、その５人だけで神宮大会に出場した。試合は神宮競技場のフィールド内の芝生コートで行なったが、事のついでに参加したような感じで、成績については全く記憶がない。

私がキャプテンを務めた翌昭和７年の東京におけるインターハイは、古澤先輩が付き添い、原田教一、仙石廉、斉藤輝義、小峯芳平、川原静夫、須田泰守の各選手らが精一杯頑張ったが、力及ばず１回戦敗退の苦汁をなめなければならなかった。

余談だが、先ごろ旧制高校記念館落成の折、展示物の中に“松高バスケット全国第２位の黄金時代”として、選手たちの写真が出ていた。黄金時代は昭和５年であり、写真は昭和８年ごろの夏の合宿練習中のもの。しかし黄金時代のスターであり、このときのコーチでもある古澤氏が後ろの木柵に腰掛けている。私も練習の応援に長野から参加し、古澤氏と並んで腰掛けている。

ところで、神宮大会にはもう一度縁があり、松高卒業後家業に従事していた私は、長野商業ＯＢその他で編成された長野のクラブチームに参加、再び外苑の芝生コートでプレイした。プレイヤーとしての経験で言えば、さらにＮＨＫチームを編成、実業団リーグ（下部）にも出たことがあるが、言うほどのものではなく、私の選手生活は前後ほぼ１０年といったところであった。

◇遊びと仕事

松高を出て６年間生家で過ごした私は、その間、日中戦争への応召などを経て、昭和１４年放送局に入る。当時私には一つの夢があった。青春を打ち込んだバスケットボールの実況を電波に乗せてみたかったのだ。

大阪での新人時代、橿原で東亜競技大会が開かれ、その中のバスケットの放送を担当する予定で出張したことがあるが、戦時中のことで番組が変更になり不発に終わった。夢が実現したのは戦後のことである。野球などに比べマイナーなスポーツと見られていたバスケットは放送の機会が少なく、その舞台は主として年間最大のイベント全日本総合選手権で、以後毎年その男子決勝の放送を担当する。

戦後の復興途上にあって忘れてならないのが、昭和２５年３月のハワイ二世チームの来訪である。芝大門のスポーツセンターでのゲームを中継したわけだが、彼らの柔軟な身のこなしによる、ワンハンドの中長距離ショットや、人球一体のドリブルなど、それまで見たこともない異質のもので、日本のバスケット界に画期的な影響を与えたのであった。

昭和２７年のヘルシンキオリンピックでは、バスケットに日本は参加していなかったが、南米チームの荒っぽさには驚かされた。３、４位決定戦でのウルグァイ対アルゼンチンのゲームだった。ウルグァイはすでに前のブルガリア戦で１２人も５反則退場者を出して３人で戦い、終了後レフリーを蹴り上げ、うち２人は以後出場停止という前科があったのだが、この試合でもゴール下の競り合いから乱闘になり、ベンチから全員飛び出し警官が出動して制止する騒ぎとなり、結局双方に５反則退場が続出、最後は４人対３人という珍ゲームになった。計７人のバスケットは前代未聞だが、どちらも防御ができず点の取り合いとなり、ウルグァイが 68－59 とリードを守り３位となった。

翌日のアメリカ対ソビエトの決勝は、アメリカが 36－25 で勝って優勝、その最後の５分間を録音して東京へ送った。

昭和３９年の東京オリンピックでは、放送を担当したもう一つの柔道会場を除いては、専ら新装の代々木第２体育館で世界のバスケットボールを眺めた。やはりアメリカは群を抜き、ハワードという黒人選手の変幻自在のプレイが印象に残った。

ルールの改正もしばしば行なわれた。昭和７年ディビジョンラインでコートを二分し、１０秒ルールが生まれる。ストーリングをさせないためだ。同じ年、フリースローレーン内に長くとどまれない３秒ルールができる。昭和１２年に得点後のセンタージャンプを廃止した改正とともに、長身者の大きすぎる利益を減らし、ゲームのスピードを上げるための措置だった。

バスケットボールの邦訳は籠球で、松高校友会でも籠球部が正式名であった。戦前は籃球という名もあった。主に関西方面で使われたのではなかったろうか。今では死語で、籠球も殆ど聞かれなくなった。ついでに言えば、新聞はスペースを縮めるためバスケなどと書くが、口では絶対こう言ってほしくはない。

さて、バスケットボールは私にとってあくまでも遊びであって、いやしくも仕事と混同する不謹慎は厳に慎んだつもりだが、他のスポーツに比べれば楽しい放送であったことは確かだ。

楽しいといえば、全日本選手権の会場で旧知の同窓諸兄としばしば顔を合わせたことだ。コートは駿河台の明大体育館、一ツ橋の国民体育館、両国の日大講堂（旧国技館）早大記念会堂など転々としたが、日本鉱業の勤労部長だった森田貞雄氏は必ず顔を見せてくれた。日本鋼管とともに優勝を争う日鉱チームの責任者だったからであ

る。わが同級の佐々木　剛君もよく見えた。学生ナンバーワンの立教大学教授で体育会の責任者でもあったからだ。また、同級の白沢正二君も常連の１人だ。かって自身もプレイをし、後に朝日新聞西部本社の運動部長になったが、バスケットが好きだった。

昭和２４年だったと思うが、名古屋で開かれた全日本学生選手権で、内山卯之助君に会ったのも忘れがたい思い出だ。放送を控えて、プログラムに目を通していた私は、東大選手の出身校の中に松本高校があったのを発見、懐かしさの余り選手控え室へ駆けつけた。内山君は突然の訪問に驚いたようだったが、私は自己紹介をして激励の言葉をかけた。

ＮＨＫを退職後もしばらくラジオでスポーツガイドを放送していたことがある。その間全日本総合選手権の取材の折、意外な記録を発見して驚いた。「低得点勝 10傑」なるものの中に、第１位に松本高ファルコンが山形師範に勝った 16－14 があり、第８位に何と長野商業が山形千歳クラブに勝った 25－22 のスコアが記録されているのだ。これこそ私自身のチームの記録ではないか。松高の記録はその２年前、つまり昭和２年第７回大会のものだ。この試合について鈴木、八代両先輩に尋ねたが、ご存知ないようだった。これらの記録は１００点ゲーム時代の今日、まず破られることはないだろう。

ファルコンの仲間達は今も３ヶ月毎の例会と隔年の総会で、一杯やりながら楽しい語らいを続けている。今は亡き発案者の古澤先輩が残してくれた、ありがたい遺産ともいうべき会合である。

昭和５４年、私は多摩丘陵の一隅の新居に移った際、芝生の庭の片隅にささやかなバスケットのバックボードを建てた。

板は正規の寸法の４分の１、リングは短身のわが身に合わせて４０センチ余り低く取りつけた。

風雪にさらされた木製の板はやがて腐り、天辺からキクラゲが生えた。そこで今度は頑丈なアクリル製の板に造り替えた。

時々ボールを投げてみるが、わが人生のゴールも近く、この次に駄目になるのはどうやらわが身の方だろう。そうなったら、バックボードが「わが青春の墓標」として残るのだろうか、ふとそんなことを考える。

［元ＮＨＫアナウンサー］

八詩（はちうた）

BISTRO・HACHI-UTA

BISTRO八詩

渋谷の喧騒を忘れそうな和める空間で、旬の素材を。

おすすめメニュー

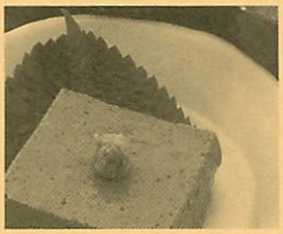
肉豆富 ネギどっさり
鮮！生野菜盛り 味噌で
有機印 キャベツどっさり炒め
緑豆でざる豆富
お刺身いろいろてんこもりサラダ

東京都渋谷区宇田川町38-3
tel:03-3496-8009
Open 17:00～Last Order 23:00
"年中無休"〈70席(2F50席・貸切OK)〉

ごまや

BISTROごまや

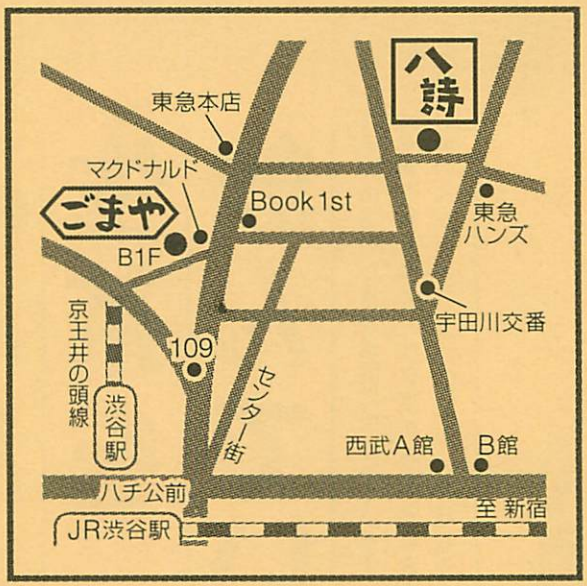
渋谷の真ん中と思えない、まるで大人の隠れ家。



おすすめメニュー

ごまや特製 手造り胡麻豆富
大正海老のふっくら揚げ
　クラッシュナッツとオレンジソース
チャイニーズチキンサラダ
　　ニューヨークスタイル
胡麻の葉御飯

東京都渋谷区道玄坂2-25-13
松原ビルB1F
tel:03-3770-8158
Open 17:00～Last Order 23:00
"年中無休"〈85席〉



【オフィス】JACKPOT PLANNING ジャックポットプランニング
〒155-0032 東京都世田谷区代沢5-35-8 岩瀬ビル1F
TEL 03-3413-9555 / FAX 03-3412-7332

KIRIN Beverage

♪

みんなが生茶を飲んでいる。

生茶のおいしさが全国に広がっています。コクとすっきりをあわせもった、生茶葉のうまみのおかげでしょうか。あの人が、そしてみんなが、今日も生茶を飲んでいる。

キリン「生茶」

生茶葉抽出物使用・加熱処理
のんだあとはリサイクル

キリンビバレッジ
ホームページアドレス http://www.beverage.co.jp